

# oritatami systemによる 無限バイナリカウンタの実装

丸山晃平 \*

2020年 1月 20日

# Contents

<b>1</b>	<b>はじめに</b>	<b>3</b>
<b>2</b>	<b>Oritatami system</b>	<b>6</b>
2.1	定義 . . . . .	6
2.2	動作例 . . . . .	9
<b>3</b>	<b>無限バイナリカウンタの実装</b>	<b>13</b>
3.1	挙動の概要 . . . . .	13
3.2	シードへの初期カウント数の記述方法 . . . . .	15
3.3	ブリック単位での動作説明 . . . . .	16
3.4	カウントアップの方法 . . . . .	21
3.5	オーバーフローの処理 . . . . .	22
3.6	フォーマット . . . . .	23
3.7	0ビットからのカウントアップ . . . . .	24
3.8	実装したoritatami system . . . . .	25
<b>4</b>	<b>考察</b>	<b>28</b>
<b>5</b>	<b>謝辞</b>	<b>28</b>

## Abstract

本研究のテーマは数理モデル「oritami system」上における無限バイナリカウンタの実装である。この無限バイナリカウンタとはオーバーフローに遭遇した際にカウンタ自らビット幅を拡張しカウントアップを続行できるようなものを指す。「oritami system」は2016年にGearyらによって提案され、その中でGearyらは有限バイナリカウンタの実装にも成功している。無限カウンタはそのカウンタが、オーバーフローが発生するごとにビット幅を広げる機能を加えることによって実装した。

本研究の成果は「Counting infinitely by oritami co-transcriptional folding」と題して国際会議SOFSEM 46th International Conference on Current Trends in Theory and Practice of Computer Science (SOFSEM2020, Limassol, Cyprus, January 20-24, 2020)に採択され、筆者が登壇発表を行った。

## 1 はじめに

人間の体は、元は小さな受精卵から細胞分裂を繰り返すことによって形作られている。その過程において外部から手を加えられることはなく、細胞が自ら増殖し、自らを制御することで現在の身体へと成長してきた。その成長の方法を定めているのが遺伝情報であり、それは細胞一つ一つの核内に存在するDNAに記録されている。

DNAの遺伝情報は、その一部が体を形成するタンパク質の設計図となっている。DNAが細胞核の中にあるのに対して、タンパク質の合成は細胞核外のリボソームで行われる。遺伝情報を細胞核の中から外へ伝えるために一時媒体として、「mRNA」と言うRNAが合成される。RNAはDNAの情報を基にRNAポリメラーゼという酵素によって生成される。この過程を「転写」と呼ぶ。RNAはDNAと似た構造をしているが、安定性が低く反応しやすい特徴を持つ。

DNAは図1の左図において示されるヌクレオチドが鎖のように連った分子である。ヌクレオチドはリン酸と糖、そして塩基から構成されるが、これはRNAも同じである。DNAとRNAは遺伝情報を塩基の配列として保持している。DNA、RNAともに塩基は4種類のものがあり、DNAとRNAでそれぞれ(A, C, G, T)、(A, C, G, U)と表現される。これらにはA-T (U)間、C-G間で水素結合を持つという特徴があることが知られている[1]。細胞核内でDNAは同じ遺伝情報を持つ二本のDNAが水素結合をすることによって、冗長性を持っている。塩基の水素結合は4種類が2対ずつになっているため、ここで言う同じ遺伝情報を持つ二本のDNAとは図2のように全ての塩基が対になっているようなものを指す。RNAはDNAの遺伝情報がコピーされているが、DNAを構成する糖は安定な「デ

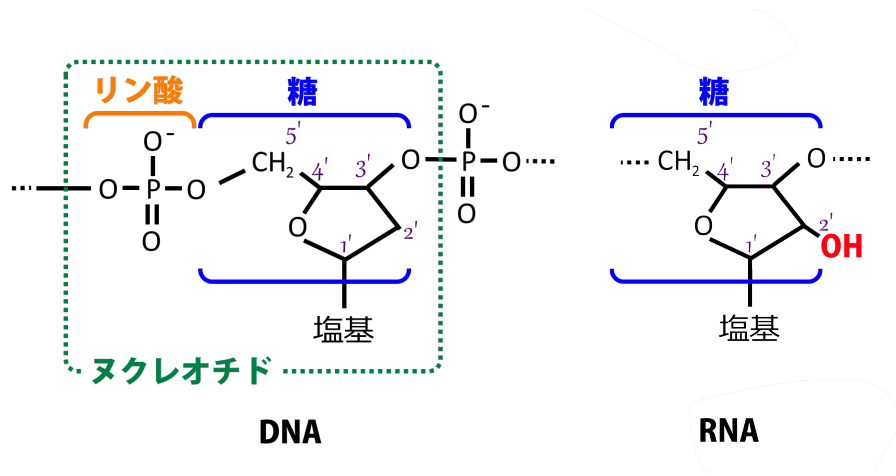


図 1: (左)DNAの構造式。DNAは図の緑枠で囲われているヌクレオチドが鎖のように連なってできている。(右)RNAの構造式。RNAの糖は2'末端にヒドロキシ基を持つリボースである。

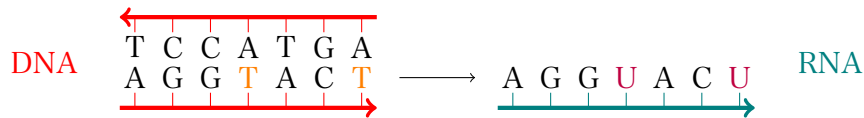


図 2: (左)二本のDNAがお互いに対になる塩基によって水素結合を形成している。(右)転写されたRNAはDNAと同じ遺伝情報を持っている。ただし塩基TはUへ置き換わる。

オキシリボース」であるのに対し、RNAは図1の右のようにその糖の2'末端にヒドロキシ基を持つ「リボース」で構成される。その影響でRNAはDNAと比べ不安定となる。

しかし一方で、RNAは様々な反応が進行しやすく、高次構造を形成し、酵素活性を示す。例えばmRNAはタンパク質設計図のコピーとして使われるだけでなく内部で水素結合をし、折りたたまれることにより図3で表されるような構造を作り遺伝子発現を調節する[2]。このような構造は、RNAがエネルギー的に安定な状態になるように水素結合した結果として得られる。RNAのヌクレオチドが転写される速度は、それが折りたたまれる速度よりも遅い[3]。そのため、RNAは転写が開始されてから速やかに折りたたみも開始される。この現象は「co-transcriptional folding」と呼ばれる。

RNAの形成する構造は塩基配列に強く影響され、その塩基配列はDNAに基づく。GearyとRothmundとAndersenが設計したDNA配列

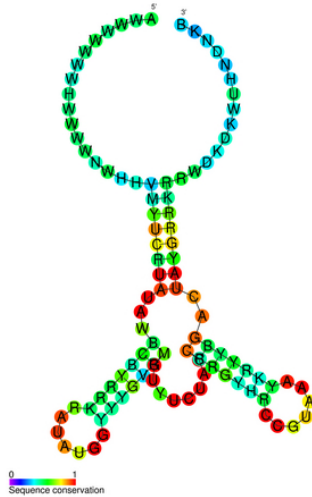


図 3: 枯草菌のRNAが形成するリボスイッチの模式図。RNAはその内部で水素結合をすることによって遺伝子発現を調節する機能も持つ。

は、試験管の中において、その配列に基づき転写されたRNAが自己組織的に規則的な構造へと折りたたまる(図 4)[4]。図中に青色で示される、転写されたRNAが形成する最終構造のことをRNAタイルと呼ぶ。

co-transcriptional foldingを研究するにあたり、その振る舞いをよりシンプルに抽象化したものとして「oritatami system」という数理モデルがGearyらによって提案され[5]、その中においてビット幅固定の有限バイナリカウンタを実装している。oritatami system はパラメータとして「転写物」と呼ばれる文字列 $w$ を持ち、これはco-transcriptional foldingにおけるRNAの塩基配列に相当する。なお、システムで用いられる文字の集合は $\Sigma$ で表される。ポリメラーゼがRNAを転写しそれが折りた

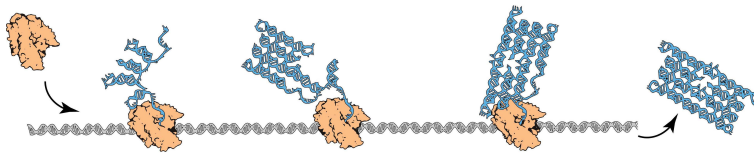


図 4: RNAがco-transcriptional foldingによって規則的な構造へ折りたたまれる様子(この構造はRNAタイルと呼ばれる)。転写開始から構造決定まで外部から手を加える必要はなく、ポリメラーゼによってRNAが転写する過程で自己組織的に構造を形成する。



図 5: RNA タイル(左)を、oritatami system 上では右のように抽象化する。この抽象化されたものは「構造」と呼ばれ、それは有向パスと内部で結ばれた水素結合の集合のペアとなっている。

たまれていくように、oritatami system は  $w$  を二次元三角格子の上に折りたたみ、「構造」  $C$  を出力する。構造  $C$  は、 $w$  に対応して頂点がラベル付けされた有向パスと、その頂点間で結ばれている水素結合の集合のペアで構成されている。Geary と Rothmund と Andersen の RNA タイルは oritatami system 上で図 5 のように抽象化されている。この右図の構造におけるパスの頂点は  $\Sigma$  内の文字によってラベル付けされている。そのラベル付けされた頂点やラベル自体のことを「ビード (bead)」と呼ぶ。ビード 1 つは短いヌクレオチド鎖を抽象化したものに相当する。また  $\Sigma$  の元はそれぞれ「ビードタイプ (bead type)」と呼ばれる。

今回の研究では oritatami system に無限バイナリカウンタを実装した。有限カウンタについては既に Geary らの実装例があり [5] それを応用したものとして、oritatami system 上でアルゴリズム的にフラクタル構造の有限長部分を作る実装例がある [6]。無限バイナリカウンタは、このように構造形成するにあたり計算が必要な機構において無限構造を作り出すことに役立つ可能性を持つと思われる。

oritatami system では既にチューリング完全なシステムが 542 種類のビードタイプを用いて実装されている [7]。チューリング完全なシステムが存在する上で無限バイナリカウンタを実装する意義としてビードタイプの削減が挙げられる。今回実装したシステムは 132 種類のビードタイプで動作する。

## 2 Oritatami system

### 2.1 定義

$\Sigma$  を有限の文字集合とし、その元はビードタイプを表す。 $\Sigma^*$  と  $\Sigma^\omega$  はそれぞれ、有限長の文字列、可算無限長の文字列の集合を表し、また  $\lambda$  は空の文字列を表す。 $w = b_1 b_2 \cdots b_n \in \Sigma^*$  は長さ  $n$  の文字列(転写物)を表

す。ここで $n$ は正数で、 $b_1, \dots, b_n \in \Sigma$ である。また、 $w$ の長さは $|w|$ で表し、 $|w| = n$ となる。 $i, j$  ( $1 \leq i \leq j \leq n$ )について、 $w[i..j]$ は部分配列 $b_i b_{i+1} \dots b_{j-1} b_j$ を表し、また $i = j$ の場合は単に $w[i]$ と表す。

Oritatami system はRNAが転写された際に起こるco-transcriptional foldingという現象を数理モデル化したものであり、転写物 $w$ を三角格子状の平面グラフ $\mathbb{T} = (V, E)$ の上で折りたたむ。 $\mathbb{T}$ 上の有向パス $P = p_1 p_2 \dots p_n$ とは、 $p_1, p_2, \dots, p_n \in V$ が全て異なり、すべての $i$  ( $1 \leq i < n$ )について $\{p_i, p_{i+1}\} \in E$ となっているものである。なお、パスの $i$ 番目の頂点は単に $P[i]$ と表す。転写物 $w \in \Sigma^* \cup \Sigma^\omega$ がoritatami systemにより折りたたまれることによってできる「構造」 $C$ は $(P, w, H)$ の三つの組で表される。ここで $P$ は $\mathbb{T}$ 上の有向パス、 $w \in \Sigma^*$ は $P$ と同じ長さの転写物、 $H$ は $H \subseteq \{\{i, j\} \mid 1 \leq i, i+2 \leq j, \{P[i], P[j]\} \in E\}$ であり、co-transcriptional foldingにおけるヌクレオチド間での水素結合を表現するために導入される。 $i+2 \leq j$ という条件は実際のRNA鎖において、近すぎるヌクレオチドは水素結合を結べない性質を反映している。転写物 $w$ はパス $P$ に沿って配置されるため、 $w[i]$ の配置先は $P[i]$ となる。 $\{i, j\}$ が $H$ に含まれている時、 $i$ 番目のビードと $j$ 番目のビードは結合していると言い、 $\{i, j\} \in H$ を $i$ 番目と $j$ 番目のビードの結合と呼ぶ。構造 $C$ の長さを文字列 $w$ の長さとして定義する。すなわち、パス $P$ の長さと同しくなる。

$R \subseteq \Sigma \times \Sigma$ はルールセットと呼ばれる集合である。また $R$ は任意の $a, b \in \Sigma$ について、 $(a, b) \in R$ ならば $(b, a) \in R$ であるとする。 $\{i, j\} \in H$ が含まれている時、 $(w[i], w[j]) \in R$ であるなら $\{i, j\}$ は $R$ に対して有効であると言う。更に、ある構造 $C$ について、 $H$ に含まれるすべての結合が $R$ に対して有効であるなら、その構造 $C$ を「 $R$ が適用された $C$ 」と呼ぶ。整数 $\alpha \geq 1$ はarityと呼ばれ、構造 $C$ 上の全てのビードについて、 $\alpha$ 本よりも多くの結合を結べないとき、構造 $C$ のarityは $\alpha$ であると言う。 $C_{\leq \alpha}(\Sigma)$ は、 $\Sigma$ 上の構造かつどのビードにおいても結合がarity本以下であるようなものを指し、文脈上で $\Sigma$ が明らかな場合は省略して表記する。

Oritatami systemは転写物を伸長させ、それを折りたたんでいくことで構造を形成する。ここで、ビードタイプ $b$ が $\Sigma$ のビードが構造 $C_1$ へ伸長される場合を考える。 $R$ をルールセット、 $C_1 = (P, w, H)$ を $R$ が適用された構造、 $p \in V$ を $C_1$ のパス $P$ に含まれていなく $\{P[|w|], p\} \in E$ となる頂点、 $b \in \Sigma$ について $H' \subseteq \{\{i, |w| + 1\} \mid 1 \leq i < |w|, \{P[i], p\} \in E, (w[i], b) \in R\}$ とする。このとき、構造 $C_2 = (Pp, wb, H \cup H')$ を $C_1$ に $b$ が伸長された構造と呼び、この「伸長」を $C_1 \xrightarrow{R} C_2$ と表記する。なお $H'$ とは、転写物が伸長することで新たに生み出されたビードが結ぶ結合を表し、 $H'$ の定義より $C_2$ にも $R$ が適用されていることとなる。この操作を再帰的に繰り返すことで構造が形成されて行く。文字の伸長を文字列の伸長に拡張

することを考える。ある有限文字列  $w \in \Sigma$  とビードタイプ  $b \in \Sigma$  において、 $C_1 \xrightarrow{R_w^*} C'$  と  $C' \xrightarrow{R_b} C_2$  を両方満たす時これを  $C_1 \xrightarrow{R_{wb}^*} C_2$  と表す。なお任意の構造  $C$  に対して  $\lambda$  を伸長しても、 $C \xrightarrow{R_\lambda^*} C$  である。

Oritatami system は、上記で説明した  $\Sigma$  と  $R$  と  $\alpha$ 、また以下に示される3つのパラメータを組み合わせた  $(\Sigma, R, \delta, \alpha, \sigma, w)$  によって表される。

- *delay* と呼ばれる自然数  $\delta$ 。
- $R$  が適用されている初期構造  $\sigma \in C_{\leq \alpha}(\Sigma)$ 。これをシードと呼ぶ。
- 転写物  $w \in \Sigma^* \cup \Sigma^\omega$ 。

構造  $C = (P, w, H)$  の持つエネルギーは  $\Delta G(C)$  で表され、 $-|H|$  と定義される。つまり、構造内での結合の数が多いほど安定する。ここで、 $C_i$  のことを  $\sigma$  から  $w[1..i]$  を伸長することによって形成された構造とする。その次に転写される  $w[i+1]$  を oritatami system によって  $C_i$  から  $C_{i+1}$  へ伸長可能である条件を以下で表す。

$$C_{i+1} \in \underset{C \in C_{\leq \alpha} \text{ s.t.}}{\operatorname{arg\,min}} \min \left\{ \Delta G(C') \mid C \xrightarrow{R_{w[i+2..i+k]}^*} C', k \leq \delta, C' \in C_{\leq \alpha} \right\}. \quad (1)$$

$w[i+1]$  が転写され構造が伸長されることを、 $w[i+1]$  が固定されると呼ぶ。この、ビードが固定されて行く様子を動画 <https://www.dailymotion.com/video/x3cdj35> にて閲覧することができる。この動画で動作しているのは Geary らによって実装された  $\delta = 3$  で動くチューリング完全な oritatami system [7] である。



## 2.2 動作例

Oritatami system において、転写物がどのように折りたたまれいくかを説明するために以下のようなoritatami systemを考える。

$$\begin{aligned}\Sigma &= \{N, B, 1, 2, \dots, 9\} \\ R &= \{(1, 6), (2, 5), (2, 6), (3, B), (4, 9), (7, B)\} \\ \delta &= 3 \\ \alpha &= 5 \\ w &= \textcircled{1}-\textcircled{2}-\textcircled{3}-\textcircled{4}-\textcircled{5}-\textcircled{6}-\textcircled{7}-\textcircled{8}-\textcircled{9}\end{aligned}$$

なお、シード $\sigma$ はこの節の図中においてビードタイプNとBから成る部分とする。

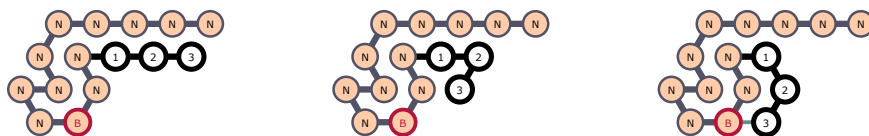


図 6: 部分配列-①-②-③において最も水素結合を多く結べるようなパス探索の様子。

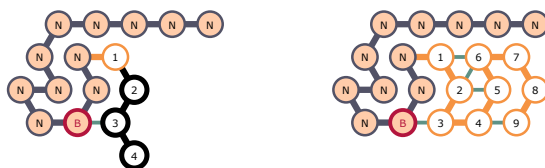


図 7: (左)①が固定され、-②-③-④の探索が始まる。(右)最終的に出力される構造。



図 8: -①-②-③の探索 (シードの一部が変更されている)

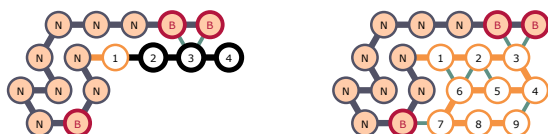


図 9: (左)①が固定され、-②-③-④の探索が始まる。(右)最終的に出力される構造。

最初に図 6 をみて見ると初期構造であるシードは $\textcircled{N}$ と $\textcircled{B}$ で表されていて、①の固定すべき場所を探索している。今、このシステムは $\delta = 3$ であるため、-①-②-③の長さ3の部分配列において、最も水素結合が多く結べる位置を探す。すると $R \in (3, B)$ より、図 6 のうち一番左で1つ結合が結べる。これが結合数最大となり、①が固定される(図 7 左)。そのまま②、③と固定されていき、最終的な構造は図 7 右のようになる。

次に図 8 をみて見ると、シードの一部が $\textcircled{N}$ から $\textcircled{B}$ に置き換わっている。この状態で-①-②-③の探索を始めると、先ほどのパス(図 8 左)よりも右図のパスの方が結合数が2と多いため右図のパスに決定される。しかしよく観察すると、どちらも①の位置は同じであるため固定位置は先ほどの例と変わらない。ただ、②の位置は変化するため(図 9)、最終的な構造は図 9 右の構造となる。

このように、これから折りたたまれる転写物の周囲において、存在するビードタイプが変化することでその転写物の折りたたまれる方が変化する。折りたたまれた転写物は、それ以降に転写されたビードと結合する可能性がある。その際にこの折りたたまれ方の変化が、その後の転写物の折りたたみに影響し伝搬されていく。

最後に図 10 のシードをみてみると、-①-②-③の探索において図 10 の左右のどちらのパスも結合数1で最大となる。この場合、左右どちらも①の位置が同じであるため①が固定される。次に-②-③-④の探索を考えると図 11 の左右どちらも結合数1で最大である。しかしこの時②の位置は左右異なるため一意に固定できない。そのためシステムは非決定的



図 10: ①-②-③の探索 (シードの一部が変更されている)

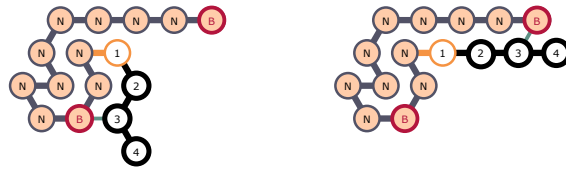


図 11: ①が固定され、②-③-④の探索が始まる。1つの水素結合が最大であり、それが図の左右の2通りある。しかし次に固定される②の位置が異なっているため固定できない。

になる。今回実装したシステムはそのような非決定性が生じないように設計されている。また、このoritami systemの非決定性を用いたものとして、NFAをシミュレートできるoritami systemが実装されている [8]。

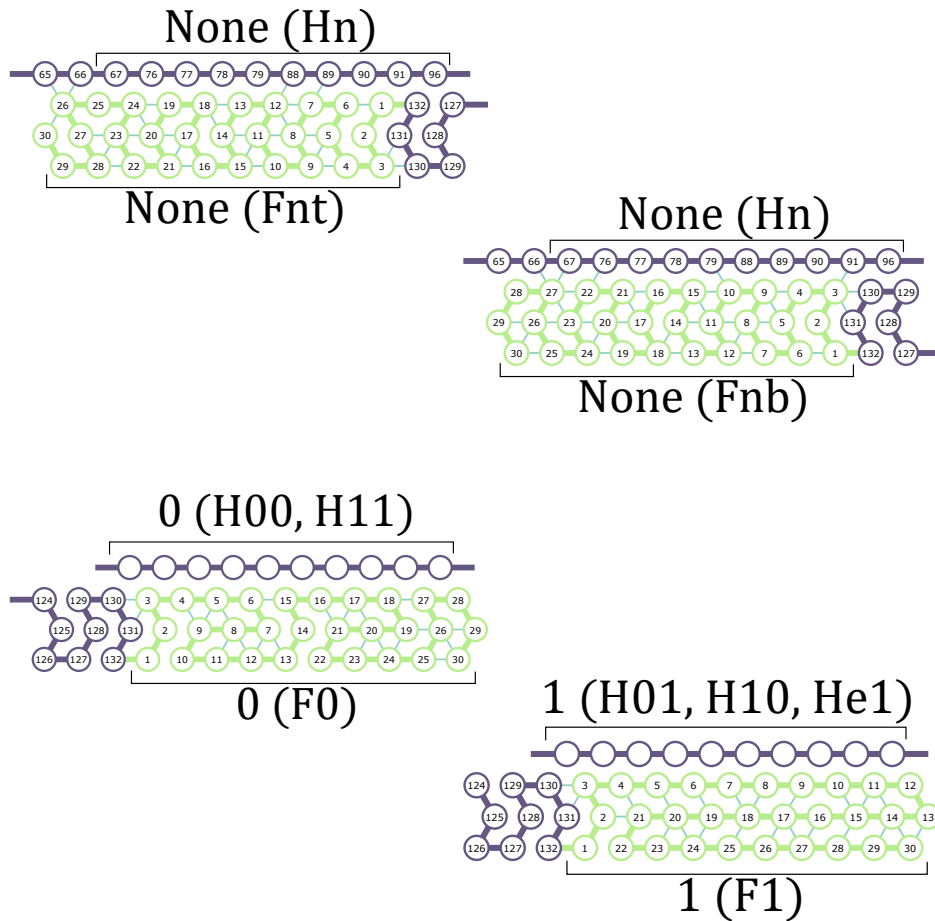


図 12: フォーマットモジュール(F)のブリックは全部で4種類存在する。上二つのFntとFnbはジグでのみ現れ、下二つのF0とF1はザグにのみ現れる。

### 3 無限バイナリカウンタの実装

この章では、oritatami system に実装した無限バイナリカウンタについて説明する。ここで言う無限バイナリカウンタとは、あるビット幅でカウントアップしていたカウンタが桁上がりのためにオーバーフローした際に、そのビット幅を拡張することでカウントアップを無限に続けていくようなバイナリカウントを指す。

#### 3.1 挙動の概要

Geary らは有限バイナリカウンタを oritatami system に実装することに成功している [5]。今回実装した無限バイナリカウンタも、基本的な設計方針はこの有限カウンタと同じである。具体的には、どちらのカウンタの転写物もジグザグ構造に折りたたまれる。この構造は図において、まずは左方向へ進み、ある段階で折り返して右方向へ進みまた折り返すというように表され、下方向へ段重ねで積み重なっていく。またジグザグ構造のうち、ジグ（右から左への伸長）では現在のカウントが1つカウントアップされ、次のザグ（左から右への伸長）ではジグでカウントアップされた値をフォーマットし、次のジグのためにその値を下方向へコピーするといった挙動も有限カウンタと同じである。ここで無限カウンタと有限カウンタで異なるのはオーバーフローに遭遇した時の挙動である。有限カウンタはオーバーフローの処理ができずに非決定的に動作してしまう。一方で無限カウンタはビット幅を1つ拡張することによってカウントアップを続行する。

実装した無限カウンタの転写物は同じ文字列を周期的に繰り返す。その1周期分の文字列は、1-2-3-...-132であり、更にこれは「モジュール」と呼ばれる以下のような4つの部分配列に分けられる。

- 1-30: 「フォーマットモジュール」もしくは「F」と呼ぶ
- 31-66: 「左ターンモジュール」もしくは「L」と呼ぶ
- 67-96: 「半加算器モジュール」もしくは「H」と呼ぶ
- 97-132: 「右ターンモジュール」もしくは「R」と呼ぶ

無限カウンタにおける転写物の配列は、この4つのモジュールを用いて(*FLHR*)\*と表すことができる。また、これらのモジュールは図中ではそれぞれ緑、青、赤、黄色に色分けする。モジュールはその周囲の環境ごとにそれぞれ特定の平面構造に折りたたまれるように設計されていて、この平面構造のことを「ブリック」と呼ぶ。すなわち、このブ

リックを「出力」とみなすと、周囲の環境は「入力」であり、oritatami system がモジュールをブリックに折りたたむ過程は情報の「処理」となる。また、出力として扱われたブリックは、別のモジュールにとっての周囲の環境の一部となることによって、情報が伝搬して行く。

例えばフォーマットモジュールについて、そのブリックを見てみる。フォーマットモジュールは図 12で示される4種類の環境に遭遇し、それぞれの環境で異なるブリックに折りたたまれる。これにおいてモジュールがそれぞれのブリックに折りたたまれるのは、式 (1)に従って転写配列内の特定のビードタイプのビード同士が結合するように設計しているためである。

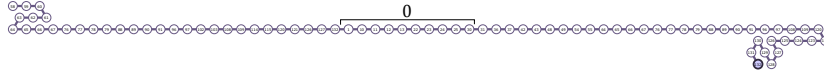


図 13: ビット幅1、現在のカウント値0からカウントアップを始める無限バイナリカウンタの初期構造(シード)。システムが動き出すと最初のジグの折りたたみが開始される。シードの形によって高さ3のジグはそのうちの下側から転写が始まる。

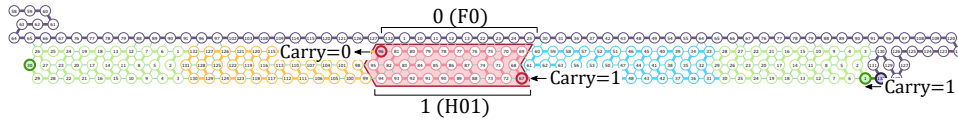


図 14: 一番最初のジグ構造。シードには初期値としての0が式 (2)(ビット幅が1すなわち、 $k=1$ )のフォーマットにしたがって記されている。また、ジグの始めにキャリーが与えられているので、このジグの中でカウントアップが行われる。赤色で表された半加算器モジュールHは1を出力し、キャリーを解消している。またこの1の出力は、正確に言うとザグ内で1と解釈され再フォーマットされるようなビードタイプの並びを指す。

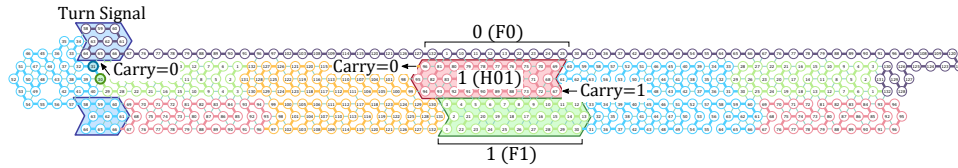


図 15: モジュールLが左ターンし、最初のザグが始まる様子。シードの左端にターンシグナルがあり、かつジグがキャリーなしで終わっているため、Lはターンシグナルと結合し折り返す。また、ターンしたLのブリックもまたターンシグナルを持つ。ザグの中ではモジュールFはHの出力を読み、下方向へその値をコピーする。

### 3.2 シードへの初期カウント数の記述方法

初期カウント数がバイナリ表記で $b_{k-1}b_{k-2}\cdots b_1b_0$ と表されるとき、シードは以下のように記述される。

$$64-65-66-\left(\prod_{i=k-1}^0 (w_{Hn}w_{Rb}w_{Fb_i}w_{Lbn})\right)w_{Hn} \quad (2)$$

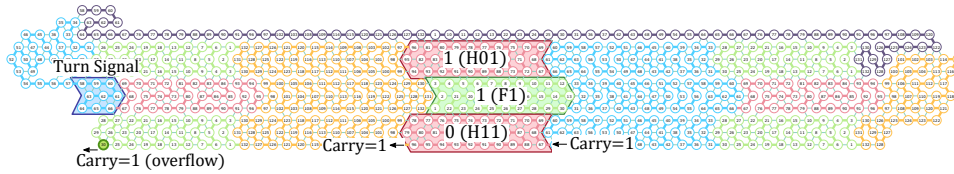


図 16: キャリーありのまま左端に到達した様子。この次に転写される L はジグの下側から転写が開始されるため、上のターンシグナルと結合するには距離が遠すぎる。そのため、L はターンすることなく直進する。

ここで、

$$\begin{aligned}
 w_{Hn} &= 67-76-77-78-79-88-89-90-91-96, \\
 w_{Rb} &= 97-102-103-108-109-114-115-120-121-126-127-132, \\
 w_{F0} &= 1-10-11-12-13-22-23-24-25-30, \\
 w_{F1} &= 1-22-23-24-25-26-27-28-29-30, \\
 w_{Lbn} &= 31-36-37-42-43-48-49-54-55-64-65-66
 \end{aligned}$$

上記の配列は、モジュール H、R、F、L がブリック  $H_n$ 、 $R_b$ 、 $F_i$ 、 $L_{bn}$  に折りたたまれた時にそのブリックの下部に現れる配列であり、それぞれ図 18、19、12、17 で確認できる。例として、初期値  $b_0 = 0$ 、ビット幅  $k = 1$  のシードは、図 14 における紫色の箇所である。



### 3.3 ブリック単位での動作説明

Oritatami systemは最初にシード部分が折りたたまれた状態から始まる。今回実装したsystemでは、ジグ( $\leftarrow$ )、左ターン( $\leftrightarrow$ )、ザグ( $\rightarrow$ )、右ターン( $\rightleftarrows$ )の4つを周期的に繰り返す。シードに記録された初期カウントが $k$ ビットである無限カウンタでは、最初のジグの転写物は $(FLHR)^k F$ で表される。ジグの中では、モジュールFとHのブリックはどちらも高さ3、幅10に折りたたまれ、またモジュールLとRのブリックはどちらも高さ3、幅12に折りたたまれる。それゆえジグは高さ3の線形構造となる。ジグ内でのキャリアの入出力はモジュールの開始地点の高さによって行われる。下側からモジュールが開始されればキャリアが与えられたこととなり、上側から開始されればキャリアがないことが伝えられる。シードは図 13のようにジグの下側から始まるため、ジグにはキャリアが入力される。キャリアの有無に関してモジュールF、L、Rはそれを次のモジュールへ伝える役割を果たす。最初のジグの中で、 $i$ 番目のモジュールHは、式 (2)に従ってフォーマットされた $b_{i-1}$ のすぐ下から転写が開始し、そのフォーマット配列に応じたブリックに折りたたまれる。つまり、そのHは $b_{i-1}$ の値を読んでいることになる。最初のジグが全て折りたたまれた後、その直後の左ターンモジュールLはターンシグナルのすぐ下に転写される。これによって高さ3のジグがその上側で終了した場合、このターンシグナル(特に58、63、64)とLの33と34が結合をし、Lが左ターン用のブリック(Lcre)に折りたたまれる(図 15)。このブリックLcreは、更に次のジグ終了後にそのブリックの下に転写される左ターンモジュールのためにターンシグナルを持つ。

最初のジグでターンが終わった後に、続いて最初のザグの転写が開始される。その部分配列は $(HRFL)^k H$ で表され、各モジュールについてもジグ同様にモジュールFとHが高さ3、幅10、モジュールLとRが高さ3、幅12のブリックに折りたたまれる。そのためザグもジグと同様に高さ3の線形構造となる。このザグが最後まで折りたたまれた直後に転写されるRは、ターンシグナル125-124-123-122と結合することによってブリックRcrとなり右ターンする。Rcrも次の右ターンのためにターンシグナルを持つ。このジグとザグが折りたたまれることがカウントの値を一つカウントアップさせることに相当する。

ここで図 14-16を見てみると、モジュールHとFのブリックが縦方向で交互に並んでいることがわかる。その列の右から $i$ 番目がカウンター $i$ の $i-1$ 番目のビットに相当し下方向へカウントの値を伝搬している。

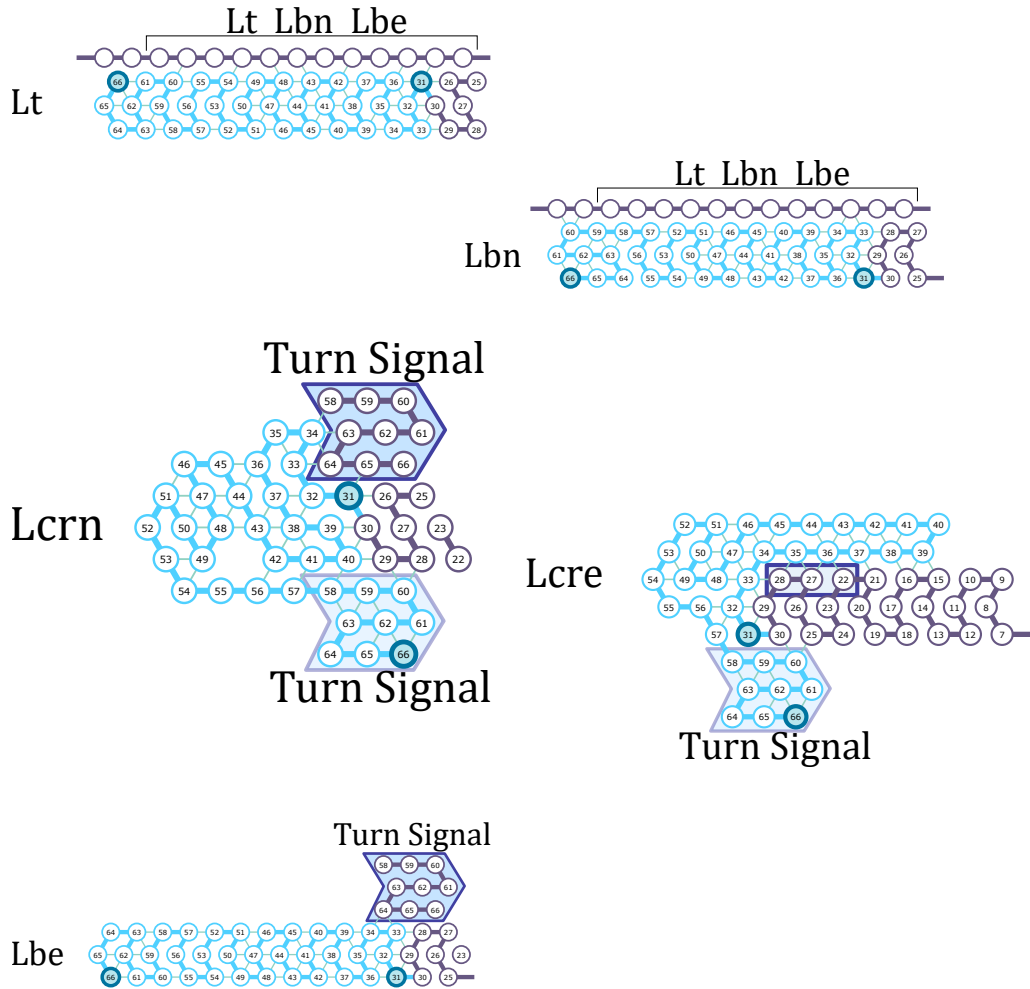


図 17: 左ターンモジュール(L)のブリックは5種類あり、図の上から順にLt、Lbn、Lcrn、Lcre、Lbeとなっている。ジグの中でLは、左端に到達するまでの間はLtかLbnに折りたたまれ、そのどちらになるかはLの折りたたみの開始地点に応じて決定される。Lが左端に到達した時オーバーフローしていなければLcrn、もしオーバーフローしていた時はLbeに折りたたまれる。一方でザグの中ではLはLbnにのみ折りたたまれる。

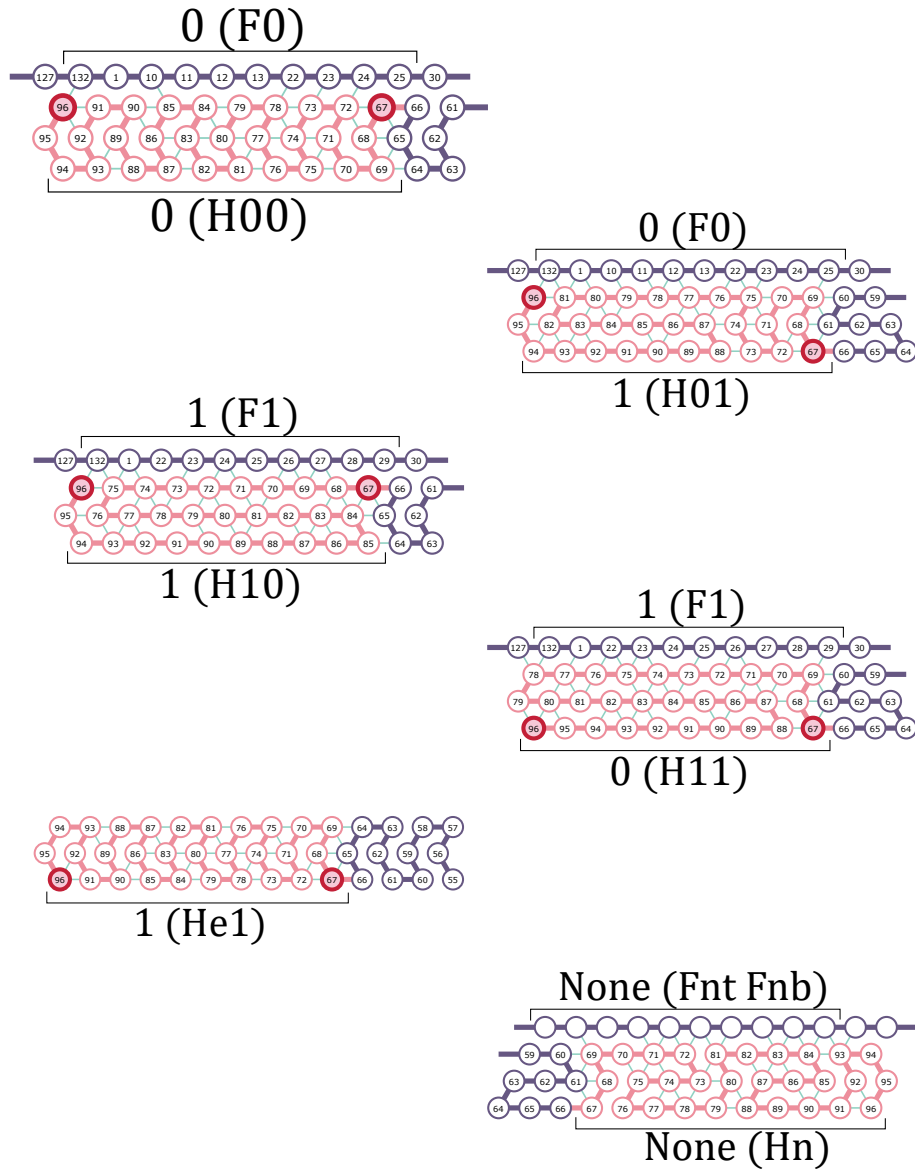


図 18: 半加算器モジュール(H)のブリックは6種類存在し、上から順にH00、H01、H11、H10、He1、Hnとなっている。ザグの時、HはHnにのみ折りたたまれ、ジグの時はそれ以外のブリックに折りたたまれる。

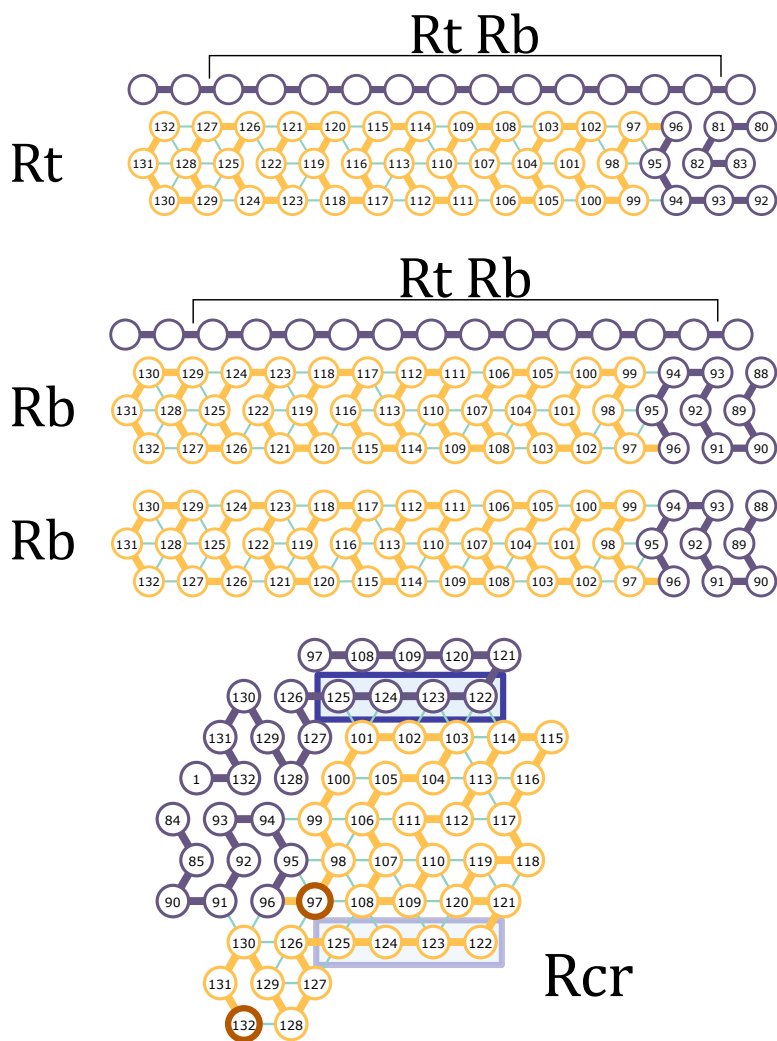


図 19: 右ターンモジュール(R)は3種類のブリックに折りたたまれる。図は上から順にRt、Rb(上に構造あり)、Rb(折りたたまれた構造が上に存在しない)、Rcrである。ジグの時、RはRtかRbに折りたたまれ、どちらになるかはRの開始地点に依存する。またここではRbに関して、2つの内どちらの構造も取り得る。ザグの時は、右端に到達するまでの間いつもRはRb(上に構造あり)のブリックに折りたたまれる。右端にたどり着いたらRcrへと折りたたまれる。

### 3.4 カウントアップの方法

ジグでは、モジュールHが半加算器に相当する役割を果たし、あるHの出力したキャリーは他のモジュール(F、L、R)によって1つ上位ビットのモジュールHへと伝えられる。無限カウンタ内でキャリーの有無はモジュールそれぞれの転写開始位置によって表現される。ジグ内で、モジュールF、L、Rはそれぞれ2種類のブリックずつに折りたたまれ、FはFntかFnb、LはLtかLbn、RはRtかRbになりうる。これらは図12、17、19を見ると、各モジュールごと一方のブリックが上から転写が始まり上で終わっているならば、もう一方のブリックは下で始まり下で終わっている。つまり、開始位置(終了位置)が異なる2対のブリックを用いてそれぞれのモジュールはキャリーを伝えている。

ジグはRcrとシードの開始位置が下側であるのでキャリーが与えられた状態で折りたたみが開始し、カウントアップをしている。カウントがオーバーフローするまでの間、モジュールHが遭遇し得る環境は、上からの入力が0か1、キャリーが有るか無いかと言う4種類の環境である。ここで言う上からの入力は、0が $w_{F0}$ として、1が $w_{F1}$ として表現されている。そして、この4種類の環境に応じてモジュールHはH00、H01、H10、H11の4つのブリックにそれぞれ折りたたまれる(図18)。なおこのモジュールHについて、ブリックの名称Hxcは、 $x$ は入力を、 $c$ はキャリー(つまり $c=0$ ならキャリー無し $c=1$ ならキャリー有り)として表している。

図14は一番最初のジグが折りたたまれている様子を表している。ジグは部分配列 $(FLHR)^k F$ で表され、図中のジグにおいて $k=1$ でシードに記述されているカウントの値は0である。ジグはシードの終了位置の影響で下側から始まるためキャリーが入力される。それを、最初に転写されるモジュールFとLがそれに続くモジュールHにまで伝える。キャリーが入力されたモジュールHは、もしその上に記述された値が0であったら図14のようにH01に折りたたまれ、もし値が1ならH11に折りたたまれる。H01はキャリーを解消するために上側で終了し、一度キャリーが消滅すればそのジグは左端に到達するまでキャリーがない状態が続く。そしてその状態でジグが終了し次にモジュールLが転写されると、そのLは一つ上のターンシグナルと結合することで通常ターン用のブリックLcrnに折りたたまれる。もし、ジグの中で一度もキャリーが解消されない場合、それはすなわちオーバーフローしている場合であり、そのままジグが左端に到達すると次のLはLbeへと折りたたまれ、オーバーフローの処理に移る。

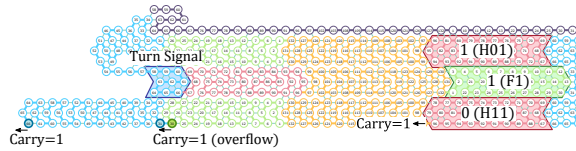


図 20: モジュールLはターンシグナルと結合せずにグライダー形に折りたたまれ、直進する。

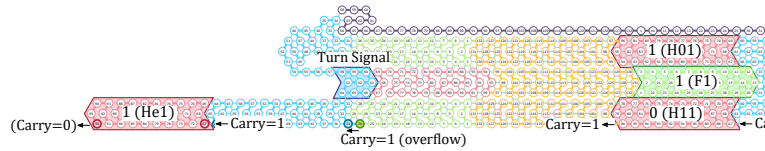


図 21: モジュールHはオーバーフローのキャリーを受け取るが、H自体は自立できるグライダー形をとる必要があるため、そのキャリーをキャンセルしない。そのためHの配列の最後は下側に配置されるがキャリーは0として扱われる。

### 3.5 オーバーフローの処理

Gearyらのカウンターではジグが下側で終了した時、つまりカウントの値がオーバーフローした時にそれを処理できない。そこで無限カウンタではオーバーフローを処理するために、ジグが下で終わった際にはモジュールLがブリックLbeに折りたたまれるように設計し、カウントアップの続行を実現した(図 20)。図を見ると、このモジュールLの一つ上にはターンシグナル(58、63、64)が存在するが、それがLのターンシグナルである33、34と結合するには遠すぎるので、Lは左ターンしない。Lbeは自立する構造であるグライダー形であり、周囲に結合を結べるものがなくともそれ自身の内部で結合をすることによって折りたたまれる。Lに続くモジュールH、R、Fについても何も無いところで折りたたみを進行する必要があるため、Lと同様グライダー形となり、それぞれのブリック名はHe1、Rb、Fnbである(図 21、22)。なおブリックHe1については本質的にH00と同じである。しかし、この二つは上下が反転していて、このブリックの一段下に来るザグのモジュールから見るとHe1は1を表す配列が露出していて一方でH00は0を表す配列が露出している。

オーバーフローした後に、モジュールL、H、R、Fと転写され、さらにその次に転写されるLを考える。このモジュールLは、この周囲に何も無い空間で左ターンする必要があるが、ターンシグナル存在しなければ再びグライダー形であるLbeとなってしまう。そこで、それを避けるために、Lの35、36がFnbの上部にある28-27-22と結合することにする

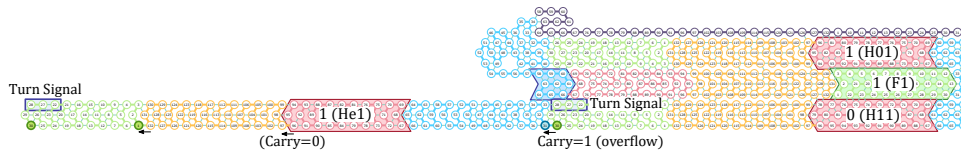


図 22: モジュールRとFが転写され、続いてモジュールLの折りたたみが開始される。ここでは、通常のターンのようにターンシグナルを持ったLは周囲に存在しない。なので、直前のモジュールFの上部をターンシグナルとして扱うことにする。

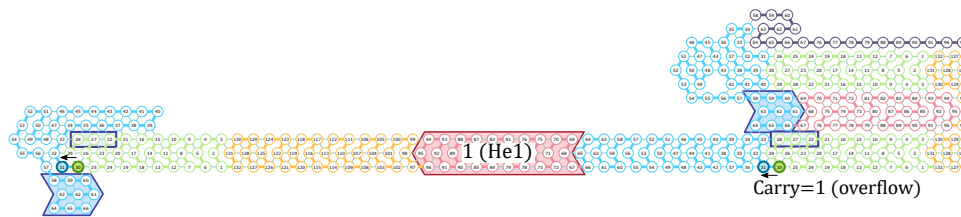


図 23: モジュールLはFのターンシグナルに結合することによって左ターンし、ザグが開始する。また、ここで左ターンしたLの最後もターンシグナルとなる。

(図 22、23)。つまり、Fnbの左上をターンシグナルとみなすことによってLは左ターン用のブリックLcre(図 17)に折りたたまれる。このためブリックFnbは常にターンシグナルを持つこととなるが、この左上の箇所は通常(オーバーフローしていない状態)では、一つ上のザグによって隠されているため、モジュールLの左ターンを促すことがない。

### 3.6 フォーマット

ジグにおいて半加算器モジュールHが働くことによってカウントアップがされることがわかった。しかし、カウントの値は式 (2)に従ってフォーマットされている必要があり、ジグが終わった段階ではそれは達成されていない。フォーマットを行うには、モジュールHとFは縦に交互に並んでいることに注目すると、ザグにおいてモジュールHの出力をモジュールFが読み、そして式 (2)に従いフォーマットするように設計すれば良い。すべてのザグはその列の下側から始まる。これはモジュールLが左ターンする時のブリックはLcrnもしくはLcreであり、どちらも下側で終わるためである。ザグにおいて、モジュール間で横方向には信号を伝える必要がないため、すべてのモジュールはザグの中では下から始まり下で終わる。なおかつモジュールH、L、Rについては縦方向にも信号を伝

える必要がないため、これらのブリックはそれぞれHn、Lbn、Rbにのみ折りたたまれれば十分である。なおモジュールFについては、Fの一つ上のモジュールHがブリックHxcに折りたたまれたのであれば、ブリックFy ( $y = (x + c) \bmod 2$ ) に折りたたまれ、フォーマットを行うように設計した。

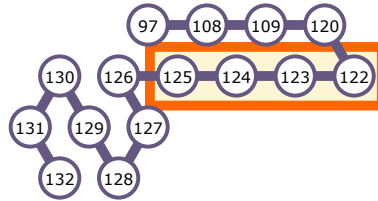


図 24: 0ビットからカウントを始める場合のシード。モジュールR用のターンシグナル部分とキャリアを与える部分が含まれている。



図 25: モジュールFが自立する構造(グライダー)に折りたたまれジグ方向へ進む。

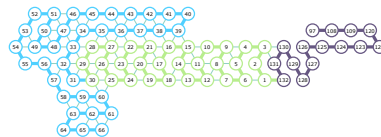


図 26: モジュールLがFのターンシグナルと結合して左ターンする。

### 3.7 0ビットからのカウントアップ

有限カウンタでは、1からカウントを始めたとしてもビット幅を定めるために、そのビット幅分の0が記述される。しかし、この無限カウンタではビット幅が拡張できるため0ビットからのカウントアップすなわち、カウントをの値をシードに記述せずにカウントアップを始めることができる。シードがカウントの値を持たないのであれば、右ターン用のターンシグナルさえあればいいため、図 24 のようなシードから転写が始まる。転写が始まると、その上部には折りたたまれた構造が存在しないので、最初のモジュールFからオーバーフローした時と同じ振る舞いをする。





図 27: モジュールHがザグ方向へ進む。

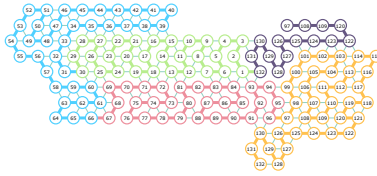


図 28: モジュールRがシードのターンシグナルと結合して右ターンし通常のカウン트가開始される。

モジュールFはグライダー形に折りたたまり、次のLはFと結合し左ターンする (図 25、26)。ジグのモジュールFは下側に何も信号を出力しないため、この段階ではまだカウン値は0ビットである。次にザグに移り、モジュールH、右ターンをするRと続きジグへと移る (図 27)。このジグで再びオーバーフローが起こり、ここではカウン値のビット幅が拡張され、値「1」のカウンが行われ、これまで通りのカウンが続く。

### 3.8 実装したoritatami system

今回実装した無限バイナリカウンタのoritatami systemは以下の通りである。なおルールセットRは表 1のように、シードσは0ビットからカウンアップを始めるのであれば図 24のようになる。

$$\begin{aligned}\Sigma &= \{1, 2, \dots, 132\} \\ \delta &= 3 \\ \alpha &= 5 \\ w &= p^\omega \quad (p = 1.2 \dots 132)\end{aligned}$$

無限カウンタを実装したsystemは、各モジュールが、設計段階で想定された環境にしか遭遇しないことが図 29の「ブリックオートマトン」によって保証されている。この遷移図では状態として環境とブリックのペアが、状態間の遷移として、折りたたまれたブリックの前半部分の構造が用いられている。また、この図で示されているブリックオートマトン

は閉じている。そのため、実装したsystemが正常に動作していることを保証するには、状態ごとの全てにおいて、モジュールが正しいブリックに折りたたまれていることを検証し、かつ遷移先もオートマトンに記述されたものと一致すれば良い。動作確認は専用開発したシミュレータに無限カウンタのoritatami systemを適用することで行われ、その結果は<https://komaruyama.github.io/oritatami-infinet-counter/>に掲載されている。

表 1: 無限バイナリカウンタのルールセット

(1,6),	(13,72),	(29,32),	(65,68),	(88,93),
(1,74),	(13,81),	(29,33),	(65,69),	(89,93),
(1,75),	(14,18),	(29,40),	(65,84),	(91,130),
(1,77),	(14,29),	(29,60),	(67,131),	(91,96),
(1,80),	(14,30),	(29,69),	(67,72),	(92,96),
(1,81),	(15,28),	(30,32),	(67,84),	(93,130),
(1,84),	(15,39),	(30,33),	(67,88),	(93,132),
(1,93),	(15,72),	(30,39),	(68,72),	(94,99),
(2,21),	(15,76),	(30,40),	(68,83),	(95,97),
(3,130),	(15,81),	(30,60),	(68,84),	(95,98),
(3,131),	(15,90),	(31,36),	(68,87),	(96,130),
(3,64),	(15,91),	(31,65),	(69,130),	(96,132),
(3,65),	(16,21),	(32,35),	(69,131),	(97,102),
(3,84),	(16,27),	(32,36),	(70,75),	(97,108),
(3,91),	(16,38),	(32,37),	(70,81),	(97,126),
(3,93),	(16,39),	(32,38),	(70,87),	(98,102),
(3,95),	(16,71),	(32,56),	(71,74),	(98,106),
(4,21),	(16,72),	(32,57),	(71,75),	(98,107),
(4,83),	(17,20),	(33,35),	(71,81),	(98,108),
(4,84),	(17,21),	(33,47),	(71,86),	(99,106),
(4,9),	(17,26),	(33,48),	(71,87),	(99,127),
(5,20),	(17,27),	(33,61),	(72,79),	(99,129),
(5,8),	(17,70),	(33,63),	(72,80),	(100,105),
(5,85),	(17,88),	(33,64),	(73,78),	(101,104),
(5,9),	(18,25),	(34,39),	(73,80),	(101,124),
(5,90),	(18,27),	(34,45),	(73,81),	(101,125),
(5,91),	(18,67),	(34,46),	(73,84),	(102,123),
(6,15),	(18,69),	(34,47),	(73,88),	(103,108),
(6,19),	(18,70),	(34,58),	(74,77),	(103,113),
(6,81),	(18,71),	(34,63),	(74,78),	(103,114),

(6,82), (18,72), (34,64), (74,83), (103,122),  
 (6,83), (18,88), (35,39), (74,84), (103,123),  
 (6,84), (19,24), (36,43), (74,87), (104,107),  
 (6,91), (19,26), (36,44), (75,132), (104,108),  
 (6,92), (19,71), (36,45), (75,83), (104,113),  
 (7,12), (19,81), (36,60), (75,96), (104,115),  
 (7,13), (20,23), (36,64), (76,81), (106,111),  
 (7,18), (20,24), (37,42), (76,87), (107,109),  
 (7,83), (21,37), (37,43), (76,93), (107,110),  
 (7,89), (22,27), (38,41), (76,95), (108,124),  
 (8,11), (22,28), (38,42), (77,80), (108,125),  
 (8,12), (22,36), (38,43), (77,81), (109,114),  
 (8,18), (22,75), (40,45), (77,86), (109,120),  
 (8,73), (22,76), (40,58), (77,87), (109,123),  
 (8,78), (22,78), (41,43), (77,92), (110,113),  
 (8,87), (23,26), (41,44), (77,93), (110,114),  
 (9,17), (23,27), (41,45), (78,127), (110,119),  
 (9,72), (23,28), (41,57), (78,132), (110,120),  
 (9,73), (23,73), (42,54), (78,99), (111,117),  
 (9,83), (23,74), (42,56), (79,84), (112,117),  
 (9,86), (23,75), (43,48), (79,88), (113,116),  
 (9,87), (24,71), (44,47), (79,90), (113,117),  
 (10,15), (24,72), (44,48), (79,96), (114,122),  
 (10,67), (25,30), (45,51), (79,97), (115,120),  
 (10,79), (25,60), (46,51), (79,98), (116,120),  
 (10,81), (25,69), (47,49), (80,83), (118,121),  
 (10,85), (25,73), (47,50), (80,84), (118,123),  
 (11,14), (26,29), (47,51), (80,88), (119,121),  
 (11,15), (26,30), (48,50), (80,89), (119,122),  
 (11,64), (26,31), (49,53), (80,95), (119,123),  
 (11,66), (26,65), (49,54), (80,96), (120,123),  
 (11,78), (26,66), (52,57), (81,132), (121,126),  
 (12,33), (26,69), (55,60), (81,89), (122,126),  
 (12,61), (26,70), (58,63), (81,96), (124,129),  
 (12,63), (26,71), (59,62), (82,87), (125,127),  
 (12,64), (26,72), (59,63), (82,93), (125,128),  
 (12,65), (27,35), (60,66), (82,94), (125,129),  
 (12,66), (27,36), (60,69), (82,95), (126,129),  
 (12,77), (27,64), (61,66), (83,86), (126,130),

(12,78), (27,66), (61,67), (83,87), (127,129),  
 (12,81), (27,67), (61,68), (83,92), (127,132),  
 (12,88), (27,68), (61,69), (83,93), (128,130),  
 (13,18), (27,69), (62,65), (84,131), (128,131),  
 (13,30), (28,33), (62,66), (84,93), (128,132)  
 (13,31), (28,35), (64,69), (85,130),  
 (13,32), (28,60), (64,85), (85,90),  
 (13,33), (29,31), (65,67), (86,90),

## 4 考察

今回実装した無限カウンタは、Gearyらのカウンタと設計の考え方が似ているが、左ターンモジュールにオーバーフローした際の処理と、その後左ターンシフトに戻る処理を加えることでカウンタビット幅の拡張を実現している。Oritatami systemは既にGearyらによってチューリング完全なシステムが実装されている[7]。このシステムを用いれば無限カウンタも実装できるが、このチューリング完全なシステムで使用しているビードタイプ種類数は $|\Sigma| = 542$ であるのに対して、今回実装した無限カウンタは $|\Sigma| = 132$ であり、より少なくなったという利点がある。

## 5 謝辞

本研究を行うにあたり、研究への指導や助言並びに共同でTAMCやSOM-SEMの論文執筆をしてくださった関新之助先生、指導教員並びに本修士論文の査読を引き受けてくださった伊藤大雄先生、TAMCへの論文を共同で行ってくださったSzilárd Zsolt Fazekas先生、森田怜央くん、研究を行う上で助言をくださった生方祐樹さん、増田優生さん、Yo-sub Han先生、Hwee Kimさん、Nicolas Schabanel先生、研究を行う上で必要な手続きを行ってくださった渡邊文江さんに対して厚く感謝の意を表します。本研究はJST Program to Disseminate Tenure Tracking System, 6F36、KAKENHI Grant-in-Aid for Challenging Research (Exploratory) 18K19779、for Young Scientists (A) 16H05854、JSPS Bilateral Programing No. YB29004、電気通信大学目黒会から予算を受けて行いました。

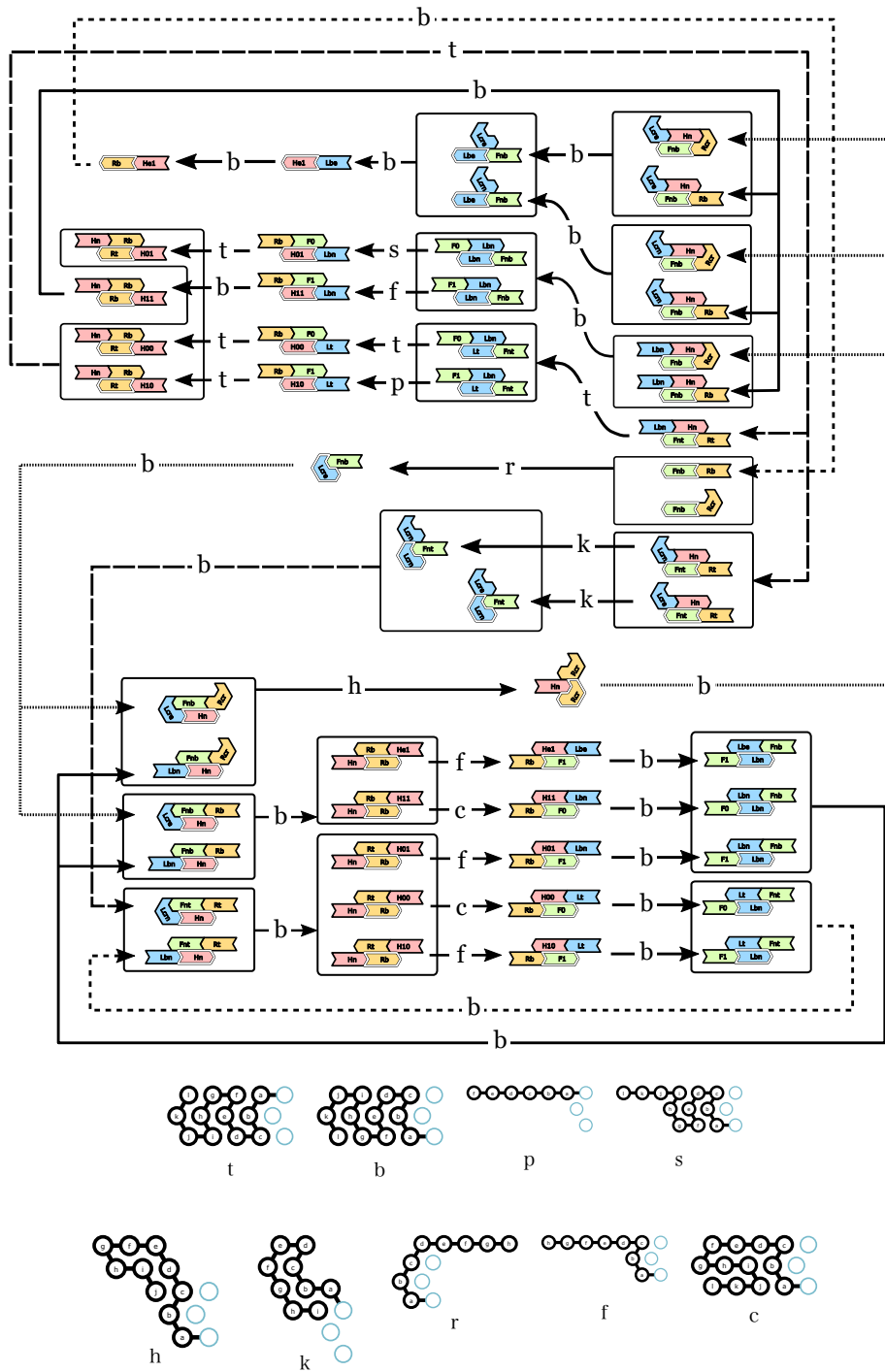


図 29: 無限バイナリカウンタのブリックオートマトン

## References

- [1] B. Alberts, D. Bray, K. Hopkin, A. Johnson, J. Lewis, M. Raff, K. Roberts, and P. Walter, *Essential cell biology*. Garland Science, 2013.
- [2] K. L. Frieda and S. M. Block, “Direct observation of cotranscriptional folding in an adenine riboswitch,” *Science*, vol. 338, no. 6105, pp. 397–400, 2012.
- [3] A. Xayaphoummine, V. Viasnoff, S. Harlepp, and H. Isambert, “Encoding folding paths of rna switches,” *Nucleic acids research*, vol. 35, no. 2, pp. 614–622, 2007.
- [4] C. Geary, P. W. Rothmund, and E. S. Andersen, “A single-stranded architecture for cotranscriptional folding of RNA nanostructures,” *Science*, pp. 799–804, 2014.
- [5] C. Geary, P. Meunier, N. Schabanel, and S. Seki, “Oritatami: A computational model for molecular co-transcriptional folding,” *International Journal of Molecular Sciences*, vol. 20, no. 9, p. 2259, 2019.
- [6] Y. Masuda, S. Seki, and Y. Ubukata, “Towards the algorithmic molecular self-assembly of fractals by cotranscriptional folding,” in *Implementation and Application of Automata - 23rd International Conference, CIAA 2018, Charlottetown, PE, Canada, July 30 - August 2, 2018, Proceedings*, pp. 261–273, 2018.
- [7] C. Geary, P. Meunier, N. Schabanel, and S. Seki, “Proving the Turing universality of oritatami cotranscriptional folding,” in *Proc. ISAAC 2018*, pp. 23:1 – 23:13, 2018.
- [8] Y. Han, H. Kim, Y. Masuda, and S. Seki, “A general architecture of oritatami systems for simulating arbitrary finite automata,” in *Implementation and Application of Automata - 24th International Conference, CIAA 2019, Košice, Slovakia, July 22-25, 2019, Proceedings*, pp. 146–157, 2019.